

平成16年度知床世界自然遺産候補地科学委員会第2回会議 概要

日時：平成17年2月15日 13:00～18:00

場所：北海道大学農学部4階大講堂

出席者：科学委員会委員、エゾシカWG委員、水産庁、北海道教育委員会、斜里町、羅臼町、環境省東北海道地区自然保護事務所、林野庁北海道森林管理局、北海道、知床財団

議題1

委員Aより、たくさんの会議が立ち上がっているが、それぞれがバラバラにギリギリのところまで議論をしているため、議論の内容が他の会議に反映されにくい、との意見があり、委員長より、パイプ役が必要との指摘があった。行政がパイプ役として役割を果たす必要が確認された。

議題2

エゾシカWG、植物、動物、海洋、河川の各グループより、それぞれ委員B、委員C、委員D、委員E、委員Fが調査項目を提案し、優先度の議論を行った。

委員G：外来生物に対するアクションの共通認識が必要（植物：アメリカオニアザミ、アライグマ、ニジマス）。また、アメリカオニアザミは大変な問題だが、今からもずっと駆除を行っていくのか、また、除去して効果があったのかの検討も必要。

委員H：外来種も大切だが、エゾオオカミ、カワウソなどの絶滅種に関する検討も（再導入を示唆）。

委員D：IUCNには再導入のガイドラインがある。参考に出来る。

委員F：知床をどういうレベルで管理するか、例えばルシャはクマを見るにはいいところだが、手つかずの自然ということであれば、ダム撤去、林道撤廃も考えていいと思う。そこまでこの科学委員会で考えるのか？

委員I：目標のレベルを高くすると、知床の問題が浮かび上がってくる。そうすると、自然再生というものに類似した話になるのでは？環境省の見解を聞きたい。

環境省A：自然再生にはまず実態把握が必要で、再生自体はその後の話となる。優先度判断のクライテリアとしては、IUCNに指摘されているものが緊急。それに加え、指摘されてはいいがこれだけは絶対にやらなければいけないというのがあるだろう。科学委員会には科学的な議論をしてもらいたい。とはいえ、社会的な面を考慮しなければ他の枠組みとかけ離れていく。そこをつなぐのが行政かと思う。

委員J：インベントリが重要。今はあまり再検証出来るもの、証拠のあるものがない。ちゃんとしたものをこの機会に。

委員D：資料2-1は良くできているが、一点欠点があり、陸と海をつなぐものには川だけでなく、海岸線もある。現在あるインベントリは不十分で、特に海岸部のリスト（インベントリ）が特に必要と思う。

委員E：海は海草からほ乳類から魚まで「海域WG」でひとくくりになっている。何をやったらいいかわからないが、細分化されていないだけいいかも。海のインベントリが必要。

委員 I：各主体がバラバラに調査をしても他に情報が伝わらない。データの共有化が必要。

委員 K：現状把握が必要。海洋関係は、既存資料のデータベース化が望まれる。

委員長：今日結論は出せないので、2月末までML上で議論を行い、年度末までに事務局側で対応出来るものを科学委員会委員に示す、というスケジュールでよいか。

委員 D：全ての項目のおおもとになる基礎データとして、気象データが欲しい。羅臼と斜里にはアメダスがあるが、岬にはないはず。灯台などに設置出来るか？

議題 3

午前中のエゾシカWGの報告をエゾシカWG座長より行った。

委員 E：明治以降の地球温暖化は結構大きなインパクト。その中で、生態系を元に戻せるのか？

委員 C：ガンコウラン等は、岩峰の上に残っているが、シカの増加の後にまた岬台地上に回復するかは不明。なので予防的対策を取る。

委員 G：知床の草本類は、北方を代表するもの。共通認識のBは、楽観的すぎるかと思う。

委員 A：そもそもの問題は、植物の回復。植物の回復にはどのくらいシカを減らせばよいか等、植物グループから答えは出ないか？

議題 4

事務局から、科学委員会に検討してもらいたい項目を提示し、委員長からそれに対応する新たなWGの設置を提案して頂いた。

委員長：IUCNからの指摘に対しての科学委員会からの意見書を踏まえると、魚道だけでなく様々なオプションが考えられるので、1.の「魚道の設置等に関する」は削除しないか？

委員 F：今まで見てきた中では、道路が出来るとその上流にダムが出来るように思う。ホロベツ川は、橋が大きいため、ダムの必要がなく、ダムがないというのが実態ではないか。河川WGでは、ダムを造らなくても済むような道路など検討出来ないか。

委員 A：私も魚道だけのWGとは思っていない。

委員長：では、「魚道の設置等に関する」は削除する。

委員 E：海域WGについては、1kmが広い狭いか等を議論していく。

その他

委員 D：海草、海鳥、昆虫、(社会科学、地質、アイヌ民族)などの専門分野の委員が欠けているという前回科学委員会が出た指摘は、検討しないか？

環境省 A：今後委員長とも相談して検討していきたい。

IUCN からの書簡の公表

2005年2月2日付けのIUCNからの書簡を仮訳とともに公表した。

委員長：私がこれについて聞いたのは3日前であった。情報の速やかな伝達という前回書簡に係

る経緯からの合意もあるが、準備で大変な時期であり、今日の会議がこれ一色で染まらないように、今まで待って公表することとした。前回のシェパード氏の指摘と内容は同じと思う。

委員 E：厳しい内容。前の指摘を繰り返している。正直、WG でどこまでできるか自信がない。特別委員に是非地元漁協、地元行政、道、国も入ってもらいたい。

道庁 A：知床は持続的な漁業がなされてきたという前提で推薦されたものと思う。WG が直接漁業者と話す場を持つことも考えられる。

委員 K：今、自分の調査で羅臼で漁民に聞き取り調査を行っている。漁民は我々が考えていることとは違うことを考えているようで、危機感がふくらんでいる。地元と合意のない世界遺産はあり得ないと思うので、期限は短い、いい形にして頂きたい。

委員 L：指摘の b) の marine component は、エリアだけの問題ではないのではないか？

委員 E：前回のシェパード氏の指摘と全くぶれていない。

委員長：b) の substantially とは、何 km を指すのか、IUCN と環境省の間にやりとりはあるのか？

環境省 B：ない。

委員 E：今、何 km とは言えない。時間は限られているが、答えを出すには時間が欲しい。

委員長：我々は、IUCN 受けするものだけをやるのではなく、あくまで科学的な観点から知床の保全に助言を行うもの。その後は我々の手に負えない。しかし、スイス (IUCN 本部) や羅臼に WG が行くぐらいの心構えが必要。

委員 F：羅臼の方が漁業形態が細分化されているので、ひとつのものが取れなくなると生活出来なくなるという危機感があるものと思う。

委員 E：私たちが漁協の人を呼ぶときは、特別委員ではなくオブザーバーとして参加して欲しい。いいか？

環境省 B：よい。

委員 F：一番はじめに委員 A が言っていたこと (議題 1 参照) が、更に重要かなと思う。色々な会議が立ち上がる中、広報で地元で情報が伝わっているかとも思ったが、現実にはそうではない。自然関係のイベントも、道産子は全参加者の 1 割で、あとは本州からの人。地元で理解してもらえ事業を考えるのも、科学委員会の仕事かと思い、提案させてもらおう。

この後、委員 H と委員 B による IMC 9 (第 9 回国際ほ乳類学会議) の案内、委員長による北海道自然保護連合および北海道自然保護協会から科学委員会に寄せられた要望書の紹介があり、所長より閉会の辞。